

## 讃岐の埴輪について

令和6年度第7回香川県埋蔵文化財センター 考古学講座

令和7年2月15日（土）10：00～11：30 小野秀幸

### はじめに

3世紀前半頃～7世紀中頃の間、日本列島内では有力者の墓として古墳が築かれました。古墳は、山の尾根を削る、土を盛るなどして築いた人工の丘（墳丘）の周囲に濠（周濠）を掘り、丘には埋葬施設を設けます。また、その丘には、粘土を用いて形づくり焼き上げた「埴輪」が立て並べられました。現在の香川県域にも大小さまざまな数多くの古墳が築かれ、埴輪が立て並べられていました。

今回はテーマ展「かがわの小さなハニワ天国」に合わせ、その内容を踏まえ、展示内容を補足する形で香川の埴輪について話をしていきます。

### 1 埴輪とは

#### ① 埴輪の種類

埴輪は、円筒埴輪・形象埴輪の2種類に大きく分けられます。円筒埴輪は、形は土管に似ています

（図1）。表面をおおう縦方向や横方向の細い筋状の模様の上に、粘土の帯を張り付けた「突帯」と呼ばれる出っ張りが何条か見られます。突帯と突帯の間には円形や方形、三角形の孔が開けられています。

一方、形象埴輪は、道具や動物、人のかたちをしたものが見られます。奈良時代に記された歴史書『日本書紀』には、人形埴輪が大王の死に伴って生き埋めにされる人の身代わりとして埋められた伝承が記載されています（図2）。このことから、人形埴輪が埴輪の起源と考えられがちですが、埴輪の歴史のなかでは、比較的新しく出現したもののようです。

#### ② 埴輪の始まり —もとは壺とそれを載せる台—

弥生時代の中期から後期にかけて、中・四国地方などでは、集落のまつりなどで使用する壺などを置く筒型の台として器台形土器が作られていました。これは、弥生時代後期後半頃には集落では使用されなくなります。この頃に、吉備地方では、特別に作られた器台形土器と特殊な壺形土器（特殊壺）が出現します。これらは集落のまつりのためではなく、主に首長の墓に供えるために用いるようになります。その後、特殊壺を載せる大型の器台形土器は高さ1mを超える特殊器台へと変化します。これには渦巻き状の模様や、巴形や三角形の透かし孔が施され、葬送用の祭礼に用いるものとなります。そして、特殊器台は特殊器台形埴輪へと変化し、それを簡略化して作られたものが円筒埴輪となります（図3）。

また、特殊器台とその上に載せた特殊壺の形状を簡略化させたものが朝顔形埴輪となります。

円筒埴輪は、3世紀後半頃の古墳時代前期から使用され始め、6世紀終わり頃の古墳時代後期まで作り続けられます。これらは当初、古墳の埋葬施設を囲うように配置されます（図4）が、その

後、墳丘（図5）やその周囲を囲む濠の外側に巡らされた堤の上（図6）などに配置されていくようになります。その際に、朝顔形やキヌガサ形等の形象埴輪が挟み込まれる場合があります。さらに、木製の立てものが共に並べられることもあります。笠形、石見型、鳥形、盾形、鞞形、大刀といった、埴輪でも作られる器財類の形状のものが知られています（図8・9）。

円筒埴輪とは別に、壺形土器も焼かれる前に底に穴が開けられて実用品として機能しないものが意図的に作られ、古墳に並べられます。これを祖型にしたものが壺形埴輪で、これも古くから存在します。香川県の事例では前者が確認でき、この地域の特徴となるようです。前方後円墳が導入された最初期の古墳である高松市所在の鶴尾神社4号墳では、墳丘の裾に焼く前に底部に穴を開けた広口壺を多く並べられています。この壺は底部に開けられた穴を除くと通常のものと同じ作りがあります。他の地域では、先に触れた特殊壺を祖型とするもの他に、畿内で用いられた二重口縁壺を祖型としたものが継続し、香川県とは異なるあり方をするようです（図10 大久保1996・蔵本2004）。

### ③ 形象埴輪の出現

一方、道具や動物、人のかたどった、なじみの深い形象埴輪の出現は円筒埴輪より後になります。3世紀中頃に家形が、やや遅れて鳥形が出現し、次いで4世紀中頃に、盾形・鞞形等の器材形や、犬形・猪形等の動物形が、そして少し遅れて舟形がそれぞれ出現し、5世紀中頃に人形・馬形が出現するようです。これらの出現は、古墳上での葬送に伴う祭祀の形態の変化と関連し、立て並べられる場所などにも差があります。表1に各種埴輪の消長を示しました。

年代 器種	200	300	400	500	600
器台(円筒)	■	■	■	■	■
壺	■	■	■	■	■
家	■	■	■	■	■
鳥	■	■	■	■	■
盾・鞞	■	■	■	■	■
犬・猪	■	■	■	■	■
船	■	■	■	■	■
人	■	■	■	■	■
馬	■	■	■	■	■

表1 主たる埴輪の消長（石野編1998を元に作成）

以下は、形象埴輪を研究されている高橋克壽氏の学説（高橋2011）をまとめました。

○形象埴輪 → 古墳という場における群毎の性格付けが重要

○埋葬施設上の形象埴輪群

埋葬施設の構築・埋葬行為と形象埴輪の樹立の時間関係の把握ができるのが墳頂部における樹立。



墳丘と同時か墳丘構築後の埋葬行為（副葬品の埋納含む）の後に樹立。

○各種形象埴輪と出現順は以下の通り。

種類と出現順

設置場所

家形埴輪

墳頂上の方形壇を囲う方形埴輪列の内側（石山古墳（図 11）ほか）

出現過程は不明で、定型化する前のものが前期中頃の古墳墳頂から何例か死者の住まいではなく、遺骸の在りかの日印あるいは被葬者の霊を含む祖霊との交わりの場。



鶏形埴輪

方形埴輪列の内側もしくは埴輪列上

鶏 → 死者を他界へ導く力を持つと信じられた



器材形埴輪

方形埴輪列の内外に多量に並べられる

盾・蓋 → 鞆・甲冑・衝立など



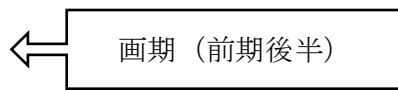
家形埴輪（中期）

方形埴輪列の一边を構成

→ 埴輪列の外に出る

= 墳頂部祭祀の形骸化？

中期中頃以降、方形埴輪列確認困難に



この段階でも墳頂における土器・土製品を用いた祭祀が行われる（規模不明）

埴輪列の円筒  
朝顔形より壺や蓋形を乗せたものが好まれた  
→ 特殊器台・特殊壺の名残か

墳頂における家と器財からなる埴輪配置は古墳時代の最後まで続くが、人物・動物は加わらない。

○古墳 水辺の光景 水に浮かぶ島状の存在のイメージ



船形埴輪（前期末中期中頭出現 中期前半盛期）→水鳥形と同じ時期出現

他界観 彼岸へ船で行くことを強く観念。 → 水鳥 彼岸の世界の象徴

周濠内に準構造船の部材が埋められている。

殯宮から古墳へ被葬者を運んだ後、解体し埋められたと想定される。

人物・動物埴輪

墳頂以外の樹立場所は様々だが、古墳の 1 段目のテラスや裾への配置が目立つ（主に関東の後期後半の古墳で、西日本は目立たない）。

古墳上に並べられた埴輪群像は、群馬県保渡田八幡塚古墳の事例（図 12）から、「首長権継承儀

礼」の場を表現したとする説（水野 1971）や、大阪府今城塚古墳の事例（図 13）から<sup>もがりのみや</sup>殯宮の前で「大王権継承儀礼」として執り行われた葬送儀礼の表現とした説（森田 2011）がある。後者は墳丘上ではなく、古墳築造後、古墳を囲う中堤の一面に設けられた張出の上に並べられており、本来は墳丘の外側に配置されるべきものであったと想定されている（高橋 2011）。

大型古墳に大量に配置される先の事例とは別に、中小墳や造り出しに人物や動物を少量配置する例がある。前者の例の凝縮版と捉えられる。

↓

坂出市別宮北 2 号墳の事例はそれに相当する可能性があります。直径約 20m の円墳に 2.3×3.8 m の長方形の造り出しが附属し、周囲には幅 2～4.9m、深さ 0.2m の浅い皿状の断面形を持つ溝に囲まれるこの古墳は、ベース層まで削られており、埋葬施設のみならず墳丘まで失われています。埴輪は周溝全体から出土しますが、形象埴輪が造り出し周辺に集中する傾向にあり、報告者はこれらが造り出しの上に並べられていたと想定しています。削平の状況と形象埴輪の復元状況からかなりパーツが失われていることが伺え、現時点では 2 点の人形、1 点の馬形、1 点の家形が確認できるほか、これらとの接合関係の不明な人形の腕や腰部、馬形の脚部、盾形の破片、部位や形状不明なパーツがあり、少なくとも人形が 1 点以上、馬形が 1 点以上存在した可能性があります。これは、造り出し及びその周辺において人物や埴輪を並べた祭祀が行われていたことが伺える状況と言える。

## 2 円筒埴輪の作り方

基本的には粘土紐を積み上げて成形します。作業の流れは以下のように考えると考えられます。

- ①上下に重ねた粘土紐の継ぎ目を消しながら積み上げます。
- ②作業をある程度続けた時点で、若干乾燥させます。これは、徐々に上に積み重ねる際に、下に荷重がかかり変形するのを防ぐためです。
- ③内外面を板状の工具を用いたり、指で押さえたりナデたりして形を整えます。
- ④粘土紐で突帯を作って貼り付け、透かし孔を施します。

なお、形の整え方や突帯の貼り方、突帯の断面形状、透かし孔の形状は、埴輪が作られる時期によって変化します。

- ⑤乾燥させた後、焼き上げます。焼き方は以下のとおりです。

### A 野焼き（古墳時代前期から中期の途中まで）

焼きあがった埴輪の、主に外面に焼く時の燃料が接した部分に黒いシミのようなものが付く

のが特徴です。香川県の代表例は、高松市所在の<sup>なかつまにしいつぼ</sup>中間西井坪遺跡で見つかっています。やや浅くて大きな穴（土坑）の中で埴輪が焼かれていました。土製棺や土師器などもあわせて製作していたようです。なお、この遺跡で焼かれた埴輪や土製棺は今岡古墳等に供給されていました。

### B 登り窯（古墳時代中期に須恵器を焼く技術が導入されたのち）

焼きあがった埴輪に、黒いシミが付かず、ものによっては灰色に焼き締って仕上がるのが特徴です。窯を使うことにより高温で焼かれるのと、窯に空気を通して酸化炭素で焼いたのち、窯の空

気の通り道を外からふさぎ還元炎で焼くことで、須恵器と同じような灰色に発色するためです。

東かがわ市所在の仲戸東遺跡<sup>なかとひがし</sup>では、窯本体は見つかっていませんが、窯で焼かれたと考えられる円筒埴輪や船形、馬形、石見型といった形象埴輪が見つっています。

報告者はこの仲戸東遺跡の埴輪窯で焼かれた埴輪について、「特定の古墳への埴輪供給を目的とした短期操業の窯」の可能性を想定し、その成立については、「石見型埴輪や船形埴輪等、在地の埴輪系譜にはない、新たな器種が導入され」ていることから、「畿内や吉備等の地域からの製作技術の援助」があったと想定しています（蔵本編 2016）。ただ、現時点ではどこの古墳へ埴輪を供給したかについては不明なようです。

### 3 埴輪からわかることー別宮北2号墳や相作牛塚古墳の人形埴輪が巫女とされるのはなぜ？ー

全国各地で出土している様々な形象埴輪は、それらが作られた時代の文物の姿がある時はリアルに、またある時はデフォルメした形で写し取っています。馬形埴輪に表現された馬具には、実際に古墳から出土するものと同じようなものが表現されていますし、人形埴輪の服装は往時の装いを窺い知る格好の材料であると言えます。

ここでは、一例として巫女とした別宮北2号墳・相作牛塚古墳<sup>あいさこうしづか</sup>の人形埴輪について触れます。この二つに共通するのは「意須比<sup>おすひ</sup>」（表記は「游須比」「於須譬」とも）という衣類をまとっている点です。

広辞苑には「襲（おすい）…衣服の名。頭からかぶって衣装の上をおおうもの」とあり、後世の衣被<sup>きぬかつぎ</sup>はその名残とされているようです。神事や婚礼の際に用いるものとされているようですが、万葉集の中に詠まれた歌にこの「意須比」が登場するものがあります。

ひさかたの 天<sup>あま</sup>の原<sup>はら</sup>より 生<sup>あ</sup>れ来<sup>きた</sup>る 神<sup>みこと</sup>の命<sup>みこと</sup> 奥山<sup>おくやま</sup>の 賢木<sup>さかき</sup>の枝<sup>えだ</sup>に しらか付け 木綿<sup>きぬ</sup>取り  
付けて 斎瓮<sup>いらいべ</sup>を 斎<sup>いわ</sup>ひ掘<sup>ほ</sup>り据<sup>たか</sup>ゑ 竹玉<sup>たかたま</sup>を 繁<sup>しじ</sup>に貫<sup>ぬ</sup>き垂<sup>し</sup>れ 獣<sup>しし</sup>じもの 膝<sup>ひざ</sup>折<sup>ま</sup>り伏<sup>ふ</sup>して たわや女の  
襲取り懸<sup>か</sup>け かくだにも 我<sup>われ</sup>れは祈<sup>いの</sup>ひなむ 君<sup>きみ</sup>に逢<sup>あ</sup>はじかも

（巻第3 379 番歌 大伴坂上郎女 祭神歌 出典 高木市之助他 1957）

「…榊の枝に細く割いて白髪のようにした麻やコウゾをつけ、穴を掘って須恵器の甕を据え付け、管玉をたくさん糸に通して連ねてつるし、猪のように膝を折って伏せ、…襲をまとい…」という神事の情景が詠まれており、そこから意須比が神事に際し、用いられた衣類であることが分かります。別宮北2号墳例・相作牛塚古墳例ともに右肩に布の片側端を留め、左脇下を通してもう片側を右肩に戻すように意須比をまとい、その上から腰にゆるく帯を巻き体の前で結わえる表現がなされています。相作牛塚古墳例はさらに襷<sup>たすき</sup>をかけています。この襷も神事の際に用いていたことが万葉集に詠まれた歌から伺うことが出来ます。従って神事を司る女性をかたどった埴輪であることが伺え、そのような役割を担う女性の職としては巫女であると判断できるでしょう。この歌は天平5（733）

年に詠まれたことが記されていることから、8世紀半ば頃の神事の情景を伺えます。これが古墳時代の祭祀と全く同じものであったかどうかは不明ですが、万葉集研究では埴輪から読み取れる情報を援用することが多いようです。

#### 4 おわりに

以上、香川県内で出土している埴輪を知るために、他地域の資料を使いながら、外観してきました。多くは触れられませんでした。当時の畿内政権と讃岐の関係は埴輪を通してもうかがうことができます。讃岐独自の文化を持ちつつ、畿内政権の影響を受け入れて讃岐の文化へ取り込むというのを、今と変わらず当時の人々も行っていたと考えられます。今回の展示で紹介しているいずれの資料も、欠損した部分はあるものの、例示した他地域の資料と比較しても見劣りしないものばかりだと思います。例示した資料を参考に、埴輪の成り立ちや製作技術、使われ方を思い浮かべながら、改めて「かがわの小さなハニワ天国」をご覧ください、欠けた場所の「先」に思いを馳せていただけたらと思います。

#### 引用・参考文献

- 高木市之助他 1957 『日本古典文学大系 4 万葉集 一』岩波書店
- 坂本太郎他 1967 『日本古典文学大系 67 日本書紀 上』岩波書店
- 水野正好 1971 「埴輪芸能論」『古代の日本 2 風土と生活』角川書店
- 小川安朗 1986 『万葉集の服飾文化 下 万葉人の服飾感覚』六興出版
- 川西宏幸 1988 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第 64 巻第 2 号 日本考古学会
- 大川町文化財保護協会 1990 『富田茶臼山古墳発掘調査報告書』大川町文化財保護協会
- 京都大学文学部考古学研究室 1993 『京都大学文学部博物館図録第 6 冊 紫金山古墳と石山古墳』  
京都大学文学部博物館
- 広島県立歴史民俗資料館 1995 『平成 7 年度特別企画展 古墳誕生の謎をさぐる-特殊器台からはにわへ-』  
広島県立歴史民俗資料館
- 大久保徹也・森 格也編 1996 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第二十五冊 中間  
西井坪遺跡 I』香川県教育委員会
- 石野博信編 1998 『古墳時代の研究 9 古墳Ⅲ 埴輪』雄山閣
- 稲村 繁・森 昭 2002 『ものが語る考古学シリーズ⑥ 人物はにわの世界』同成社
- 香川県教育委員会 2000 『県道高松王越坂出線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 雄山古墳群』  
香川県教育委員会
- 高松市教育委員会編 2004 『高松市埋蔵文化財調査報告第 69 集 太田第 2 土地区画整理事業に伴う埋蔵文  
化財発掘調査報告 第七冊 天満・宮西遺跡 ～旧河道編～ 上西原遺跡 ～第  
2 次調査～』高松市教育委員会
- 蔵本晋司 2004 「丸亀市吉岡神社古墳の再検討」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要 XI』  
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

- 千賀 久編 2008 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 特別展図録 第 69 冊『はにわ人と動物たち-大和の埴輪 大集合-』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
- 高松市教育委員会編 2010 『高松市埋蔵文化財調査報告第 125 集 相作牛塚古墳』高松市教育委員会
- 香川県教育委員会 2010 『一般国道 11 号道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 別宮北遺跡・別宮北古墳群』香川県教育委員会
- 大久保徹也 2011 「第一章 古墳文化の地域的諸相 二 四国」『講座日本の考古学 7 古墳時代 (上)』青木書店
- 鈴木裕明 2011 「1 墳丘と外表施設の諸相 ⑧埴輪樹立と木製樹物」『古墳時代の考古学 3 墳墓構造と葬送祭祀』同成社
- 高橋克壽 2011 「3 考古資料の実態と葬送祭祀 ⑤形象埴輪と葬送祭祀」『古墳時代の考古学 3 墳墓構造と葬送祭祀』同成社
- 森田克行 2011 『シリーズ「遺跡を学ぶ」077 よみがえる大王墓・今城塚古墳』新泉社
- 和歌山県立紀伊風土記の丘 2011 和歌山県立紀伊風土記の丘 開館 40 周年記念特別展『大王の埴輪・紀氏の埴輪-今城塚と岩橋千塚-』和歌山県立紀伊風土記の丘
- 鐘方正樹 2012 「2 手工業生産 ④埴輪作り」『古墳時代の考古学 5 時代を支えた生産と技術』同成社
- さぬき市教育委員会編 2013 『さぬき市埋蔵文化財調査報告 第 11 集 津田古墳群調査報告書 第一分冊 (報告篇)』さぬき市教育委員会
- さぬき市教育委員会編 2013 『さぬき市埋蔵文化財調査報告 第 11 集 津田古墳群調査報告書 第二分冊 (考察篇)』さぬき市教育委員会
- 蔵本晋司編 2016 『国道 11 号大内白鳥バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第 1 冊 仲戸遺跡 仲戸東遺跡』香川県教育委員会
- 大阪府立近つ飛鳥博物館 2016 『大阪府立近つ飛鳥博物館 平成 28 年度春季特別展 古墳とは何か-葬送儀礼からみた古墳-』大阪府立近つ飛鳥博物館
- 高松市教育委員会編 2017 『高松市埋蔵文化財調査報告第 185 集 相作馬塚古墳Ⅱ』高松市教育委員会・株式会社日進堂
- 蔵本晋司 2017 「四国における前半期古墳出土埴輪の基礎的研究-香川県今岡古墳出土埴輪を中心として-」『香川県埋蔵文化財センター年報 平成 27 年度』香川県埋蔵文化財センター
- 蔵本晋司 2018 「香川県内出土の埴輪」『香川県埋蔵文化財センター年報 平成 28 年度』香川県埋蔵文化財センター
- 徳島文理大学文学部・高松市教育委員会編 2019  
『高松市埋蔵文化財調査報告第 203 集 徳島文理大学文学部・高松市教育委員会連携協定調査報告書 第 2 冊 船岡山古墳群Ⅱ (古墳時代遺物編)』徳島文理大学文学部
- 徳島文理大学文学部・高松市教育委員会編 2020  
『高松市埋蔵文化財調査報告第 212 集 徳島文理大学文学部・高松市教育委員会連携協定調査報告書 第 3 冊 船岡山古墳群Ⅲ (考察編)』徳島文理大学文学部